わせると、当日の舟興のメンバーから尚白ははずされていたに相違なく、それを根に持った非難のための非難が「尚白が難」であったと思われる旨を教師が話せば、学生の目の色がいつもの授業のときと全く変ることは間違いないことであろう。この学生の目の色の変る授業を教師がひとつひとつ積み重ねることによって、学生に学び考えることの面白さを体感させることこそが、いつの学校教育においても求められるものであり、教育の原点もまたここにあるのだと思う。

国文学の勉強、特に古文の学習には「読むということ」が中心に据えられねばならぬと思う。まず、本文をじっくり読み、へんだなと思う箇所を足場に、可能な限りの深読みに徹するところから研究は出発するのだと思う。受験ということを念頭に置かざるを得ない現在の中学高校の学校教育では、どうしても覚えることが中心になり、授業は答の出るかたちで進められがちだ。しかし、学問の本来のすがたを思うとき、反省が加えられねばならぬことは間違いない。覚える授業から考える授業への転換を切に求めたい。特に大学の授業に求めたい。もちろん、理想は覚えることと考えることの両立であり、両者は車の両輪だ。両輪が噛み合うかたちをとりながら、その思索が一歩一歩確実に深まりゆくすがたこそ学問の本来のすがたなのだと私は思う。

（注1）「わづかに」は、どうやら、やっと、の意であるが、この語はどの語にかかるのか判然としない。筆のそれを考えねば理解できぬところである。長明は、はじめ、「わづかに」と書きつけた時は、下は「周梨槃特が行に及べり」と記すつもりであったのだろうが、「周梨槃特が行に」とまで記してきて、急に下を「及べり」と結んだのでは、周梨槃特は、釈迦の弟子のうち最も愚鈍であったとはいえ、後には、悟りの最高位の阿羅漢果を得た者であり、その周梨槃特の修行に達したと記すことは、これを読む人が何と思うか、気がとがめて、「だに及ばず」と、筆がそれてしまったのであろう。

最後を「申してやみぬ」と、どっしりと結ぶ。「申しぬ」とあれば、頭うなだれた者の筆である。

結章のこの文勢・筆致の変化が何に起因するかについては、「広本方丈記の結章の自問自答について」（藤女子大学国文学雑誌・昭和四十九年十月号）で読み解いたが、文勢・筆致の変化から筆者の心の鼓動、心情の起伏にまで読みを深めるとき、本文に何が書かれているかの内容の理解だけでは捉えられぬものが浮びあがってくるように思う。

行く春を近江の人と惜しみけり

先師いはく、尚白が難に、近江は丹波にも、行く春は行く年にもあるべしといへり。汝いかが聞き侍るや。去来いはく、尚白が難あたらず。湖水朦朧として春を惜しむにたよりあるべし。殊に今日の上に侍ると申す。先師いはく、しかり。古人も此国に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるものを。去来いはく、此一言心に徹す。行く年近江にゐ給はば、いかでか此感ましまさん。行く春丹波にゐまさば、もとより此情浮ぶまじ。風光の人を感動せしむる事、まことなるかなと申す。先師いはく、汝は去来、共に風雅を語るべき者なりと、殊更によろこび給ひけり。（去来抄）

尚白の非難が肯綮に当るとするなら、「行く春を丹波の人と惜しみけり」「行く年を近江の人と惜しみけり」「行く春を近江の人と惜しみけり」の三句は等価ということになる。惜しんでも惜しんでも再びは手にし得ぬことを知る悲しみの中にそれでもと追い求める思慕の念を静かに深く宿すとき、「惜しむ」の感情は最も純化されたすがたをとる。「行く春」を山国の丹波の人と惜しんだのでは、「行く春」は山にぶっかって摑まってしまうのではないか。摑まったのでは「惜しむ」にはならない。また「行く年」を近江の人とだったら、「さ夜ふくるままに汀や氷るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」（後拾遺集）であり、寒気の身を刺す蕭条たる湖上の眺望からは「惜しむ」の気持など起きようはずはない。「行く春」を「近江の人」とであってはじめて「湖水朦朧として春を惜しむにたよりあるべし」である。こんなこともわからぬ尚白は俳諧の道における全くの初心者なのだろうか。否である。どの教科書にも、「大津の人。近江蕉門の最古参者のひとり」と注されている。この点に学生の注意を向け、彼等の自由な推測をさせたあと、「行く春を」の句は元禄三年の作であり、この頃、近江蕉門は旧派（尚白・千那組）と新派（洒堂・正秀・乙州組）に分裂し、芭蕉は力を急速につけてきた後者の若手組と親密の度を深め、前者が後者に拮抗すべく編んだ撰集『忘梅』（刊行ははるか後の安永六年だが、元禄四年には成立していたと思われる）の旧さと質の低さを冷笑するようなこともあったらしく、尚白・千那と芭蕉の仲は元禄三・四年頃から疎遠険悪なものになり（芭蕉が千那の怒りを買い、釈明を試みた元禄四年九月二十八日付の千那宛の書状も残っている）、元禄七年十月十二日、大阪の旅宿での芭蕉の死の床にも二人は姿を見せることがなかったことを話し、これらの事実を思い合

は、次に、重く淀む深淵がやにわに急湍に転じたかと思われる勢で、「たちまちに三途の闇に向はんとす」と書きつけ、「何の業をかかこたむとする」と、ながくその胸に突き刺さっていたかと思われるにがいことばを吐き捨てる。ところが、次にふたたび筆は急から緩にもどり、「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり」と、続く。「仏も教へ給ふ、事にふれて執心なかれと」とある場合と思い比べれば、執心深い己れを内省し、頭うなだれる長明の姿が、「となり」から思い浮ぼう。この「となり」は下の「障りなるべし」の「べし」に響き合うが、次の「今、草庵を愛するも」から「あたら時を過ぐさむ」までは、内省の筆であり、沈む心の鼓動が聴き取れよう。「静なる暁、このことわりを思ひつづけて」と、前段の内容を繰り返す次段の「静かなる暁」から「道を行はむとなり」までも、この内省の筆であり、筆勢はさらに重く沈んでいる。

ところが、「みづから心に問ふ」その自問は、「しかるを」の逆接の接続詞を境にして、筆致がふたたび急になり、「姿は聖人にて、心は濁りに染めり」と、型どおりの対句で書きつけたあと、次にもう一度対句を重ねるつもりで、「栖は」と筆を継いだものの、「栖は……、保つところは……」から、その意図はうかがえるが、文型は対句の枠に納まらず、対句のかたちをゆがめている。というのは、「栖は浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところは周梨槃特が行にだに及ばず」とあれば、対句は型どおりのものとなるが、「すなはち」を「栖は」の下に添えることによって漢文臭を帯び、居ずまいを正したその筆は、次に「わづかに」の副詞を書き継いたので、当然、下は「及べり」でなければならぬところを、「わづかに……及ばず」と曲折する。この筆のそれ（注1）は執筆時の心情の起伏をそのままに伝えるものであり、筆の勢もまた急である。

「しかるを」以下「及ばず」までの文勢は、「静かなる暁」以下「行はむとなり」までのひとつ前の文勢に比して、見違えるほど強い。この強い文勢を受けて、次に「もしこれ、貧賤の報のみづから悩ますか、はたまた、妄心のいたりて狂せるか」と、自己の全生涯を叩き割り、否定する、長明のわが身への怨念をもこめたすさまじいまでの否定の言が投げつけられる。文勢はこの上なく強く、はげしい。「貧賤の報のみづから悩ますか」と「妄心のいたりて狂せるか」の間に挟み込まれた「はたまた」からは、筆執る長明の心の高鳴りが聞き取れよう。

さらに興味深いのは、次の「その時」の一語である。この語がなく、「はたまた、妄心のいたりて狂せるか。心、さらに答ふることなし。ただ、かたはらに……申してやみぬ」と文が続いておれば、「狂せるか」から「心、さらに答ふることなし」に筆はそのまま続き、「狂せるか」で最もはげしく燃えあがったわが身への怨念のほむらも「心、さらに」以下で、次第におさまったことを示そうが、「その時」の一語は、「狂せるか」と「その時、心、さらに答ふることなし」がひとつづきの筆ではなく、「狂せるか」の次で、筆は一呼吸していることを教えてくれる。そして、一呼吸した筆は、

恋と雑の歌を四季の歌に詠みかえよと、すっきり説いているのに、毎月抄では、春の歌を秋か冬の歌などに、また恋の歌を雑や季の歌などに詠みかえよと、微妙にずらして説き、さらに「しかもその歌をとれるよときこゆるやうによみなすべきにて候」の注意が添えられているのも、詠歌大概の記事を横辷りさせたのかと仮に想った場合の偽作者の筆のしわざとはどうも思えない。

詠歌大概は定家の作と考えて間違いあるまい。だとすると、詠歌大概を自作とする者の微妙な筆の息づかいをそのままに残す毎月抄も定家の作ということになろう。

「読むということ」は筆の息づかいをも窺わせるが、時にはこの筆の息づかいが思わぬ重要な結論を導き出すこともあり得ると思う。毎月抄が定家の真作である可能性を抄中の「ただ」「げに」「まづ」の一語から推論した拙稿「毎月抄真作説に対する補強」（国語と国文学・昭和四十三年三月号）を参看願えれば幸いである。

抑（そもそも）、一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに三途の闇に向はんとす。何の業をかかこたむとする。仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。いかが要なき楽しみを述べ、あたら時を過ぐさむ。

静かなる暁、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひていはく、世をのがれて山林に交はるは、心を修めて、道を行はむとなり。しかるを、汝、姿は聖人にて、心は濁りに染めり。栖は、すなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところは、わづかに周梨槃特（しゅりはんどく）が行にだに及ばず。もしこれ、貧賤の報のみづから悩ますか、はたまた、妄心のいたりて狂せるか。その時、心、さらに答ふることなし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。（方丈記）

方丈記の結章である。「さきにもしるし申しし」を挟み込んだ毎月抄の筆者の、真作者なるがゆえにと思われる微妙な筆の息づかいに比し、こちらのそれは筆執る長明の心の鼓動をそのまま伝える変化のはげしい文勢・筆致である。「かたはらに舌根をやとひて」の凝った表現ひとつを取りあげても、結章は決して一気呵成の筆ではない。にもかかわらず、今日の読者にも文勢・筆致のはげしい変化がはっきりと読み取れるということは、最初に結章を筆にした際の長明の心情の起伏がいかに大きかったかを物語るものであろう。

「抑」で筆を起こす「抑、一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し」の筆は重い。ひとつ前で「閑居の気味もまた同じ。住まずして誰かさとらむ」と自負の境地にまで高ぶった筆とは性格を異にし、老の寂寥にのめり込む心の深さがのぞいている。「抑」はこの箇所だけに使用される。他の箇所に見当る発語、ないしは発語的気分を伴う語は「それ」「すべて」「ここに」「おほかた」である。ところが、筆

案じてのことではなかった。古事談の記事（巻二、五四話）によれば、宮廷で薨じた中宮の最初は白河天皇の寵殊に厚かった賢子であり、「（中宮）御悩危急たりといへども、退出を許されざれしなり。閉眼の時、（帝）なほ御屍を抱きて、（死の穢れを）起ち避けしめ給はず」とある。

紫式部の在世時、一条天皇の御代では、どんなに帝の寵愛を受けた女性でも、病を得れば宮廷から身を退くのが掟であり、掟が掟として厳存する当時は、女性は病を得て帝の寵を失う不幸を不幸として自覚することはなかったはずである。ところが、歴史上の事実としては、院政の胎動期まで時代が下り、摂関体制を相対視し得る時がきて始めて、その登場が可能であった白河天皇が、一女性の筆になる物語の世界で、桐壺帝として、七八十年も前に先取りされたとき、これを読んだ女性達がいかに感動したかは察するに余りあるものがある。

愛情は掟の前には全く無力であり、それを当然としていた時代に、掟より愛情を優先させ、社会的慣習を愛する者の真実によって打ち破ろうとする天皇が登場したとき、女性達はその人間天皇桐壺に目を見張り、強い憧憬を抱くと同時に、現実に置かれたわが身の不幸をまざまざと凝視したに相違ない。

歴史はその身の不幸を凝視する者の深い悲しみと心の底からの怒りによって前進する。教師の読みを深めれば、桐壺の巻のこの一節からだけでも、源氏物語は歴史を動かす底力を持つ恐しい作品であることを学生に気付かせ、感動させることは可能であると思う。

本歌とり侍るやうは、さきにもしるし申しし、花の歌をやがて花によみ、月の歌をやがて月にてよむ事は、達者のわざなるべし。春の歌をば秋冬などによみかへ、恋の歌などをば雑や季の歌などにて、しかもその歌をとれるよときこゆるやうによみなすべきにて候。（毎月抄）

本歌取りに関する毎月抄の一節であるが、「花の歌をやがて花によみ、……よみなすべきにて候」と詠歌大概の「猶案レ之以二同事一詠二古歌詞一頗無レ念歟。以レ花詠レ花、以レ月詠レ月。以二四季歌一詠二恋雑歌一、以二恋雑歌一詠二四季歌一。如レ此之時無ト取二古歌一之難上歟」の記事はそのまま重なる。毎月抄を定家の真作とする立場からは、以前にものした詠歌大概の記事を念頭に置いての定家の筆ということになるし、毎月抄を定家仮託の偽書とする立場からは、毎月抄を定家の真作と見せかけるため、詠歌大概の記事を横辷りさせたのだということになろう。記事内容の比較からでは水掛け論になろう。注意したいのは「さきにもしるし申しし」の筆の息づかいである。偽作者の筆によれば、「本歌とり侍るやうは、花の歌をやがて花によみ、……」とつづけられ、「さきにもしるし申しし」が挟み込まれることはなかったのではなかろうか。軽く挟み込まれたこの句の感じは真作者の筆の微妙な息づかいを感ぜさせないか。そう思って、記事内容を見直すと、詠歌大概では、四季の歌を恋と雑の歌に、また

村君のこの理解こそ、授業とは何かの問に最も深いところから最も正しく答えた答であり、林先生の授業は自分にはよくわからなかったと繰り返し記しながらも、林先生の授業の急所をこれだけ確実に見抜き理解している小村君は力のある生徒である。ところが、普段の授業ではこの小村君の力が出ないとしたら、原因はどこにあるのであろうか。今日の学校教育の抱える問題の根は非常に深いところにあるように思えてならない。

その年の夏、御息所はかなき心地にわづらひて、まかでなむとし給ふを、暇さらに許させ給はず。年頃常のあつしさになり給へれば、御目馴れて、「なほしばし試みよ」とのみのたまはするに、日々におもり給ひて、ただ五六日の程に、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせ奉り給ふ。（源氏物語）

桐壺の巻の著聞な一節である。最愛の御息所の病が急に重くなる。帝は心配で心配でならず、お側から離せない。愛する者の行為として当然のことであり、純愛小説を読み慣れた今日の読者からすればお定まりの筋書である。ところが、次に母君が泣く泣く帝にお願いして、御息所を無理無理に里邸に引き取ってしまう。母君にすれば、帝の娘に対する寵愛が他のお方の嫉みを呼び、宮廷では落着いて養生できないと思ったからのことであろうか。

どうも違うように思える。病に冒され、帝の寵愛が薄れたのなら、そうもせざるを得なかっただろう。しかし、「暇さらに許させ給はず」「なほしばし試みよとのみのたまはする」帝の寵愛は一段と厚く、この文章のすぐあとで、御息所が宮廷から退出する際にも、一度は「輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせ給ひて、さらにえ許させ給はぬ帝であり、「いと苦しげにたゆげな」る御息所を見ては、「かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむ」とまで思召す御寵愛であってみれば、娘の養生は、帝の寵愛を忝うして、最高の医術の受けられる宮廷でするのがいちばんなはずである。ところがそうはしないで、「泣く泣く奏して、まかでさせ奉り給」うのはなぜだろうか。

学生にじっと考えさせることである。そして、理由は娘の健康を案じてのことではなかったような気がしてくるまで待つことである。この感じは実は正しいことなのだ。というのは、帝の寵愛を忝うして宮廷で養生につとめた結果、直ればよいが、直らなかったらどうなるかを考えると、母君の「泣く泣く奏して、まかでさせ奉り給」うた理由が浮びあがってくると思えるからである。

今日のわれわれからすれば、帝は人間だ。しかし、当時の宮仕え人は神として帝に仕えた。神のいちばん嫌うものは穢れであり、穢れの中のいちばんは死である。宮廷で死ねるのは天皇だけで、皇后・中宮も宮廷では死ねない。もし、天皇以外の者が宮廷を死で穢したら、その者の家族はもちろんのこと、親族の者まで官位は奪われ、都での生活はできなくなる。母君の恐れたのは、この場合の人々の身の上に起きるであろう事態を思ってであって、娘の健康を

心の動きの痛いまでに読み取れる一文である。

最初の「俺は」から「とまで思っていた」までの六行は、おそらくは普段の授業の際に小村君の構えるポーズそのままのふてくされた姿勢で筆が執られている。敬譲表現は、もちろんなしである。ところが、次の「実際、授業を聞いてみて、何を言いたかったのか、よくわからなかった」の二行を挟んだあと、「でも、授業を聞いて」から「と思いたかった」までを書き付けるとき、最初の六行をふてくされた姿勢で書き付けた小村君の中にいるもうひとりの小村君が、書くことにより（正確にいえば、書くことによって林先生の授業を思い出すことから）次第に顔を持ちあげてくる。「林先生が言ったことだ」「と言った時」と、「言われた」でも「おっしゃった」でもなく、「言った」で、敬語が使用されていないのは、林先生の授業を懸命に思い出し、思い出されてくる授業体験と思い出す小村君が一枚になっているので敬語が落ちてしまったのである。落ちたのは小村君が敬語の使用を知らぬ乱暴な言葉づかいをする青年だからではない。授業体験を対象化する余裕がなかったからであり、それだけ思い出すことに全力を傾け、真剣だったからなのである。だから、次に「始めの方にも書いたように、俺には、いったい何を言おうとしていた授業なのか、よくわからなかった」と、「実際、授業を聞いてみて、何を言いたかったのか、よくわからなかった」と記したところを繰り返しながらも、書くことにより思い出すことにより確実にひとつのことを乗り越えた小村君は、それまではその意義を掴みかねていた林先生の授業が自分にとってどのような意味を持つものかを理解し、林先生から受けた授業を対象化して捉える心の余裕を持ってきたので、次いで「でも、何かを教えてもらったような」と書き継ぐとき、その次を「気がする」ではなく「気がします」と「ます」を添えた丁寧表現で結ぶ。以後は「わかりませんが」「気がします」「思います」と「ます」を落とすことがない。そして、最後を「ありがとうございました」の心のこもった重い丁寧表現で結ぶ。文中の敬語の有無、「でも、何かを教えてもらったような気がします」以後の文体の変化は、小村君の心の動きをそのままに伝えている。

「俺は何んとなく『人間の子は人間である』と思いたかった」も、おそらくは経済的には底辺生活を送り、学校では、いわゆる落ちこぼれ組と白い眼で見られている小村君の悲しみの痛いほどに感ぜられることばである。「俺は」で筆を下し、「俺なりに」「俺は」「俺には」で筆を進めてきた最後に「俺達の授業」で「俺達」が顔を出すのも、小村君が、おそらくは自身で気付いている以上に友達との連帯を大事にしている、その思いが思わずここに顔を出してしまったからのことであろう。

付言したいのは、林先生のことばを「授業とは始めから答えのわかっている者などいない。まちがった答えが、どうして、まちがいなのかを探して、ほんとうの答えを、見つけていくのが授業である。だから、まちがった答えを出すのが、けっしてはずかしい事ではない」と解釈した、小

の「けり」叙述だけで結ばせず、「けり」叙述に敬辞を添えての「なられける」で結ばせたのであろう（頼政が従三位に叙せられたのは治承二年七五歳のこと、出家は翌年七六歳のことで、病のためであったことが知られているが、平家物語は「やがて（＝すぐに）出家して」として七五歳の出家としているのは、頼政が自身の出処を自覚的に慮ってのことと解し、筆者はそこに感嘆を深くしていることは本文の記述からして誤りのないことであろう）。

なお、前の例文で一言したが、「今年は七十五にぞなられける」の「今年」は頼政が出家した、ちょうどその年、の意味であって、「今は昔」の「今」は、この「今年」の用法から転じたものであろう。

林先生の授業を聞いて

俺は、林先生の授業を聞いても、聞かなくても、どっちでもいいと思っていた。

どちらかと言えば、聞きたくなかったと言うか、聞く気がしなかった。

聞いてみたところで、どっちみち、しょうもないだろうとまで思っていた。

実際、授業を聞いてみて、何を言いたかったのか、よくわからなかった。

でも授業を聞いて、印象に残ったのは、「授業とは、始めから、わかった者はいない、始めから、わかった、わかったと言っているのはほんとにわかっていない、何かのヒントでわかっていくのが、ほんとうにわかったことだ」と林先生が言ったことだ。

この言葉を、俺なりに解釈すると、「授業とは始めから答えのわかっている者などいない。まちがった答えが、どうして、まちがいなのかを探して、ほんとうの答えを、見つけていくのが授業である。

だから、まちがった答えを出すのが、けっしてはずかしい事ではない。」

ごくあたりまえのような気がするが、なぜか今まで忘れていたような気がする。

それから、「蛙の子は蛙」である、でも「人間の子は人間ではない」と言った時、俺は何んとなく、「人間の子は人間である」と思いたかった。

始めの方にも書いたように、俺には、いったい何を言おうとしていた授業なのか、よくわからなかった。

でも、何かを教えてもらったような気がします。それが何か、わかりませんが、でも、何か教えてもらったような気がします。

これは、社会に出てからでも、じっくり考えたいと思います。

ほんとうに、俺達の授業

ありがとうございました。

右は林竹二氏の授業「人間について」を受けた尼崎工業高校三年D組小村仁志君の手記である。これもセンテンスの結びのことばと文中の敬語の有無に注意すると、筆者の

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して、源三位入道とて、今年は七十五にぞなられける。（平家物語）

一読したところ、頼政（源三位入道）に関する事実を伝えただけの文章で、特別のことはなさそうだが、再読三読すると、筆者の心の高まりが聞えてき、見過ごせぬ問題が蔵せられている。まず各センテンスの終りに注意しよう。「子なり」「おろそかなりき」「ゆるされけれ」「したりけれ」「なられける」。現在形で書き付けられたものが、回想の形式の「き」に転じ、さらに「けり」にと変じている。現在形で筆が下されたのは頼政に関する周知の事実をそのままに記し付けただけだからである。ところが、「保元の合戦の時」と、往時への回想に向うとき、筆は「しか」「き」のかたちをとるが、過去の事実を突き離して記述するその筆からは筆者の心の高まりは聞えず、「かけたりしかども」「参じたりしかども」「おろそかなりき」「ありしかども」と書き継がれた筆の流れは、「昇殿をばゆるされけれ」を「ゆるされしか」で結ばせようとする。ところが、「しか」ではなく、「けれ」で結ばれているのは、すぐ上の「述懐の和歌一首詠うでこそ」にこめられている筆者の感動――和歌一首で昇殿を許されるとはなんとすばらしいことよとする筆者の感動――がその前までの「き」叙述の流れを押し返してしまったからである。「述懐の和歌一首詠うでこそ」にこめられた筆者の感動の大きさを思うべきである。以下の記述は、文中に一度「ありしが」で「き」叙述が顔を出すが、文末はすべて「けり」叙述で、筆者の心の高まりを直接に聞かせてくれる。

特に注意されるのは最後の文末「なられける」で、この箇所でだけ頼政に対して尊敬の助動詞「れ」を添えて待遇している。文中、何度でも頼政の行蔵に対して敬辞を添えて表現することは可能なはずだったのに、最後にだけそれをしたのはなぜか。気付くことは、最大級の詠嘆表現である「さてこそ三位はしたりけれ」と「やがて出家して」の間にこめられた頼政の出処に対する筆者の讃嘆の深さである。殿上人に栄進し、正四位下には昇進した。しかし、公卿の列に加わる三位への栄達は、平家の全盛期に源氏の出では、望んでも叶わぬのが理の当然である。でも、それ故にこそ、家門の誉のためと、「心にかけつつ」いつもいつも願望していた「三位」を、和歌の名誉でやっと手に入れた。ところが、その三位をすぐ出家して手離してしまったのである。三位の栄達に酔うこともなく、出世すればするほど、さらにその上の栄位顕職を願うのが人の心の常であるのに、やっと手に入れた三位の位を自分から返上してしまったのである。誰にでもできることではない。「さてこそ三位はしたりけれ」と「やがて出家して」とを逆態接続で結ぶ言外の接続詞にこめられている筆者の深い感嘆が思われる。平家物語の冒頭に「奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂には滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ」と嘆ずる筆者は、易経の「亢竜悔あり」あたりを念頭にして、頼政の出処に感嘆を深くしているに相違ない。この深い感嘆が、結びのセンテンスを「なりける」

「さらば歌よみ給へ」の「さらば」も、「藤六にこそいましけれ」の「けれ」に注意すれば、盗人が藤六であることは、他人から知らされたわけではなく、自分で気付いたのであるから、理屈をいえば、「されば」とありたいところだが、なぜ「さらば」なのかにも学生の疑問を起こさせ、「されば」と「さらば」のことばの肌ざわりの違いから修辞的仮定の説明に入り、生きたことばの微妙なニュアンスを学生に捉えさせたい。最後の「とこそよみたりけり」でも、通り一遍の文法の説明に終ることなく、ことばの生きたはたらきを捉えさせたい。というのは、「さらば歌よみ給へといひければ」をそのまま受ければ、「とこそよみけれ」でよいはずのところを、そうはしないで、「よみたりけれ」として、「たり」を添えたのはなぜかを考えさせたいのである。「よみたり」だけを取り出せば、「たり」は完了の助動詞であり、「よむ」という動作がすでに終わっている意味を表わすが、この文脈の中では「たり」の完了は死んでいる。意味の上では死んだ「たり」を添えているのは、語感の上でそれを生かしているからであり、「よみけれ」と「よみたりけれ」の表現にこめられた詠歎の差異を学生に感得させたい。即座に詠んだ「むかしより……」の歌で、自分の行為は卑しい盗人の行為ではなく、尊い阿弥陀様の行為を模したものなのだと巧みに言訳する着想の妙、それに「ちかひ（誓）」の「かひ」に「匙」を詠み込み、「煮ゆる」を地獄の釜の中でと鍋の中での両義に用い、「すくふ」を「救ふ」と「掬ふ」の掛詞にした縦横の機知、まことに当意即妙の冴えはみごとというほかはない。しかし、それ故にこそ、話を「とこそよみけれ」で結んだのでは、まだ話があとに続きそうで、結びが弱い。「とこそよみたりけれ」であってはじめて話は完結する。ということは、「とこそよみたりけれ」は、なんと巧みな言訳であることよ、こんな巧みな言訳をされたのでは、家あるじの女は怒るにも怒るわけにゆかなくなってしまうではないか、とする語り手の聞き手を誘い込んでの感嘆を言外に残した表現だということなのだが、こうしたことをも、学生の読みを深めることによって、学生自身で捉えさせたい。

そもそも源三位入道と申すは、摂津守頼光に五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なり。保元の合戦の時、御方（みかた）にて、先をかけたりしかども、させる賞にもあづからず、また平治の逆乱にも、親類をすてて参じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内守護にて年久しうありしかども、昇殿をばゆるされず、年たけ齢（よはひ）傾いて後、述懐の和歌一首詠うでこそ、昇殿をばゆるされけれ。

人知れず大内山の山守は木隠れてのみ月を見るかな

この歌によって昇殿ゆるされ、正下の四位にてしばらくありしが、三位を心にかけつつ、

のぼるべきたよりなき身は木のもとにしゐをひろひて世をわたるかな

わせただけの訳であることに学生も気付くはずであり、あわせて、「今は今」であり、「今は昔」であるはずはないではないかの疑問も氷解しよう。

「げすの家に入りて、人もなかりけるをりを見つけて、入りにけり」も、「入りて……入りにけり」では、もたついた表現であることに気付かせ、「入りて」を削って、「げすの家に人もなかりけるをりを見つけて入りにけり」とすれば、すっきりした文章になるのに、なぜ「入りて」を加えているのかを考えさせ、この文章が宇治拾遺物語の中の一文であることに注意を喚起すれば、学生は、耳で聞くお話の台本の性格を色濃く持つ説話文学の特色をここに読み取り、目で読む文章と耳で聞く文章の違いに気付くことであろう。さらに、説話は語り手の身振りを交えてのお話として語られるのが原則であることを教えれば、「入りて」のところで、ちょっと言葉を休み、「人もなかりけるをりを見つけて」のところで、語り手はあたりを見回し、「入りにけり」のところで、ほっとした表情身振りをしたであろうことに学生は気付くに相違なく、それは、また、「入りにけり」の「に」の生きたはたらきを学生に感得させることにもなろう。

次に、「いかに」から「よみ給へ」までのカッコの中だが、家あるじの女が藤六に向って言ったことばはこのカッコ内であるから、ここにカッコを付けるのが間違っているわけではない。しかし、カッコの付け方にはもう一工夫あってもよいのではないか。前記したように、「藤六にこそいましけれ」の「けれ」は気付きの「けり」の已然形であり、驚きをあらわすことに注意すれば、家あるじの女は藤六に向って一息に「いかに」から「よみ給へ」までを口にしたわけではないことに気付く。「いかに」から「まゐるぞ」までは、家の中が暗く、相手が藤六とは気付かぬ、「鍋に煮ける物をすくひける」盗人に向っての怒りを投げつけたことば、「あなうたてや」から「歌よみ給へ」までは、振り向いた盗人が藤六であることに気付いてからのことば。同じ家あるじの女のことばであっても、その間に振り向く藤六の動作があったはずであり、それは時間の隔てを置いたことばであったのだから、カギカッコはそれぞれに付けられるのが至当であろう。そうだとすると、もうひとつの疑問が浮びあがる。家の中が暗く、藤六とは気付かぬ盗人に対して、家あるじの女は、自分の大事な鍋の中の煮物を盗み食いされながら、「いかに……まゐるぞ」（どうして……召しあがるのか）と、食するの意味の尊敬語「まゐる」を使用しているのはなぜか、の疑問である。本文に即すれば、「まゐる」は家あるじの女の盗人に対する尊敬表現であり、その使用はいかにも不自然であるが、筆者にすると、自分はその盗人が藤六であることを知っている立場にあるため、盗人と藤六とが二重写しになり、家あるじの女の盗人に対することばなら、当然「いかに……食ふぞ」であるべきだが、藤六に対する家あるじの女の発言として記してしまったので、「いかに……まゐるぞ」になってしまったことを学生に思い付かせたい。

いうのは、藤六も「げす」であったなら、「ひと（他人）の家に入りて」でよく、ことさら「げすの家に入りて」とする必要がないからである。だからこそ、「げす」の「家あるじの女」は藤六に対して「まゐるぞ」「いましけれ」「よみ給へ」の尊敬表現をもって詰問し要求しているのである。さらに「藤六にこそいましけれ」の「けれ」が、はっと気付いた驚きをあらわすことに注意すると、藤六は「げす」の女達とも日常交際があったことがわかるし、「さらば歌よみ給へ」と、即座に歌よむことを求められているところからすると、彼の歌は下衆女達に人気のある、彼女等にもわかる歌であったことを知る。下衆ならざる身で下衆達と気さくに交わる藤六の人柄、そしてその歌が下衆女達にも人気があったのはなぜか。この疑問と「藤六」という耳馴れぬ呼び名はどう関係するのか。和歌文学辞典あたりで、「藤六」の箇所をひらけば、どんな辞典にも、本名は輔相（すけみ）で、氏は藤原。越前守藤原弘経の六男なので、藤六と称された（一説、「六」は六位であったためか）。物名歌の名手。古今集の物名歌が「うぐひす」「たちばな」など雅趣ある歌題を詠んでいるのに対し、彼のものは「しただみ」「うるかいり」「をしあゆ」など、いずれも酒の肴で、題材の多くが食物名であるのが特徴である。宴席において、眼の前のものを題材として歌を詠み、その場の座興とした。物名歌の一般的な即興性・諧謔性に加えて、より意外性のある当意即妙で機知に富んだ詠歌に優れた人物であった、という内容のことが記されており、疑問はたちどころに永解しようと忘れてしまうことが多い。授業では、学生自身にまず疑問を抱かせることが必要であろう。

冒頭の「今は昔」も、今ではもう昔のことになってしまったが、の意味であると、学生が疑問を起こす前に教えてしまったのでは、学生は以後、教師の訳を鸚鵡返しに繰り返すだけである。「今は今」であり、「昔は昔」であって、「今は昔」であるはずはないではないか、という疑問を学生が抱くまで教師は説明を控えることが必要ではないか。学生が疑問を起こし、あれこれ頭をひねった後で、どうとも合点のゆく説明がつかなくなったとき、教師は、この「今」は、次に示す例文（平家物語）の中の「今年」からおそらく転じた用法で、昨日から今日へ、今日から明日へ、の時間の流れの上の「昔」に対する「今」ではなく、藤六が下衆の家に入って、以下の事が起きた、その時、の意味の「今」であり、古語の「今」の特殊な用法として、過去に事件の起きた、その時を捉えて「今」ということのあったことを教えれば（語り手の気持に即して解すれば、その事件が起きたその時点にわが身を置いて「今」と発語しているのであろうが）、「今は昔」を、今ではもう昔のことになってしまったが、とする旧来の訳は、ことばの上でつじつまを合

（「むかしより」の歌でも、「ちかひ（誓）」にさじの意味の「かひ（匙）」が詠み込まれている）。ところが、疑問を起こさず、調べることをまずしないのが、今の学生の大半である。抱いた疑問を解き明かしてくれた説明はながく忘れることがない。疑問を起こす前に説かれた説明は時がたつ

「読むということ」試論

細谷直樹

An Essay on the Appreciation of Japanese Classics

Naoki Hosoya

Abstract

The appreciation of the text is most important for the study of Japanese literature, especially that of Japanese classics. First we must read the text carefully and find the passages which are difficult to understand. Then we must try to read the whole text as thoroughly as possible, in order to understand the passages well. It is the beginning of the study of literature. The present paper will explain the importance of the thorough reading of the text, showing how to read and understand seven short writings.

Received Apr. 26, 1994

今は昔、藤六といふ歌よみありけり。げすの家に入りて、人もなかりけるをりを見つけて、入りにけり。鍋に煮ける物をすくひけるほどに、家あるじの女、水をくみて、大路のかたより来て見れば、かくすくひ食へば、「いかに、かく人もなき所に入りて、かくはする物をばまゐるぞ。あなうたてや、藤六にこそいましけれ。さらば歌よみ給へ」といひければ、

むかしより阿弥陀仏のちかひにて煮ゆるものをば
すくふとぞ知る

とこそよみたりけれ。（宇治拾遺物語）

文意を辿るだけなら、平易な、高校一年の教材であろう。しかし、「読むということ」に論点を絞って文面を凝視すると、一読したのでは見落す多くの問題が浮びあがってくる。

まず、ここに登場する「藤六」だが、「藤六」とはどんな人物か、と問われたら、挙手できる学生はひとりもおるまい。大学に入学してくる学生の大半にとって、古文は、三題ないし四題出題される入試の『国語』の中の一題にすぎず、こんなことは入試の問にはなく、高校在学時の授業でも、著名な人物以外の人名など問題にされなかったので、知らぬのが当り前といった顔をする。くだらぬ質問をするとそっぽを向く学生は、「藤六」を目で読むだけで、耳でこの名を聞こうとはしない。「トウロク」「トウロク」と声に出し、何度も耳に聞かせると、貫之でもなく、俊頼でもなく、定家でもない、この人物の耳馴れぬ呼び名に気付くはずである。この呼称の異様さに気付かせた上で、もう一度本文を読ませると、「今は昔、藤六といふ歌よみありけり」で、本文は「昔」の「歌よみ」という説明しか与えていないかのようだが、そのすぐ下に「げすの家に入りて」とあることに注意を向ける学生が幾人か現われる。ここに注意が向くと、藤六は「げす（下衆）」でないことに気付く。と